

おおかみをだましたおじいさん

小川未明

青空文庫

北きたの国くにの、寒さむい晩方ばんがたのことでありました。

雪ゆきがちらちらと降ふっていました。木きの上うえにも、山やまの上うえにも、雪ゆきは積つもって、あたりは、一面めんに、真まっ白しろでありました。

おじいさんは、ちようど、その日ひの昼時ひるじぶん分ぶんでありました。山やまに、息子むすこがいつて、炭すみを焼やいていますので、そこへ、米こめや、芋いもを持もっていつてやろうと思おもいました。

「もう、なくなる時じぶん分ぶんだのに、なぜ家うちへもどつてこないものか、山やまの小屋こやの中なかで病びようき気きでもしているのではなからうか。」といつて、おじいさんは、心しんぱい配はいをいたしました。

「どれ、雪ゆきがすこし小やみになつたから、俺おれが持もつていつてやろ

う。」といって、おじいさんは村むらから出でかけたのでありました。

山やまへさしかかると、雪ゆきは、ますます深く積つもっていました。小屋こやへ着つくと、息子むすこは達者たっしやで仕事しごとをしていました。

「おまえは、達者たっしやでよかった。もう米こめや、野菜やさいがなくなつた時じ分ぶんだのに、帰かえらないものだから、病氣びようきでもしているのではないかと、心配しんぱいしながらやつてきた。」と、おじいさんはいいました。

息子むすこは、たいそう喜よろこびまして、

「私は、明日あしたあたり、村むらへ帰かえつてこようと思おもつていましたのです

。」と、おじいさんにお礼れいをいいました。

それから、二人ふたりは、小屋こやの中なかでむつまじく語かたらいました。やが

て、だんだん日暮れひぐちか近ちかくなつたのであります。

「お父さんとう、また、雪ゆきがちらちら降ふつてきました。このぶんでは道みちもわかりますまい。今夜こんやは、この小屋こやの中なかに泊とまつておいでなさいませんか。」と、息子むすこはいいました。

たばこを喫すいながら、火ひのそばに、うずくまつていたおじいさんは、頭あたまを振りながら、

「俺おれは、やりかけてきた仕事しごとがたくさんあるのだから、そんなことはしてられない。今夜こんやは、わらじを五足造そくくらなければならなし、あすの朝あさは、三斗とばかり米こめをつかなければならん。」と、おじいさんはいいました。

「いま時分じぶん、お父さんとうを帰かえすのは、心配しんぱいでなりません。」と、

息子は、案じながらいいました。

すると、おじいさんは、からからと笑いました。

「俺は、おまえよりも年をとっている。それに、智慧もある。まちがいのあるようなことはないから、安心をしているがいい。」
 といつて、おじいさんは、小屋を出かけました。

道は、もう雪にうずもれて、どこが田やら、圃やらわかりませんでした。しかし、おじいさんは若い時分から、このあたりは、たびたび歩きなれています。あちらに見える、遠方の森を目あてに、村の方へと歩いてゆきました。

このとき、あちらから、黒いものが、こちらに向かつて歩いてきました。もとより、いま時分、人間が、歩いてこようはずが

ありません。おじいさんは、なんだろうと思つていまずと、そのうちに近づきました。おじいさんは、体じゆう水みずを浴あびたように、びつくりしました。それは、おおかみであつたからです。

おじいさんは、はじめて息子むすこのいったことを思い出だしました。

「おお、息子むすこのいうことをきいて、今夜こんやは泊とまって帰かえればよかつた。」と思つたのです。しかし、いまは、どうすることもできませんでした。

おじいさんは、じつとして、おおかみの近づちかいてくるのを待まっていました。そして、いいました。

「おまえは、俺おれみたいなのやせた、骨ほねと皮かわばかりの人間にんげんを食くつても、なんにもならないだろう。もつとふとつた、うまそうな人にんげ」

間まのところへ、おまえをつれていってやるから、おまえは、黙だま
 って、俺おれの後あとからついてくるがいい。俺おれは、そのふとつたうまそ
 うな人間にんげんを、家いえの外そとへ呼び出だしてやるから。」といいました。
 おおかみは、黙だまっていました。そして、おじいさんに、飛とびつ
 こうとはしませんでした。おじいさんは、自分じぶんのいったことが、
 おおかみにわかったものかと、不思議ふしぎに思おもいながら、なるだけお
 おかみのそばをさけて、田たや、圃はたけの中なかを横切よこぎりながら、歩あるいてい
 きましたが、その間あいだは生いきた気持きもちちもなく、村むらをさして急いそぎまし
 た。すると、ずつと後あとから、黒くろいおおかみは、やはり、こちらに
 ついてくるのでした。

おじいさんは、懐ふところにあるだけのマツチをすっては、火ひをつけて、

たばこをふかしながら歩いてきました。獣^{けもの}は、みんな火^ひをおそれたからです。

やっと、おじいさんは、村^{むら}のはずれに着^つきました。そこには、猟師^{りやうし}の平作^{へいさく}が住^すんでいました。

「平作^{へいさく}——早^{はや}く出^でろ、おおかみがきたぞ！」と、おじいさんはどなりました。

平作^{へいさく}は、銃^{じゆう}を持^もって、家^{いえ}の外^{そと}に走^{はし}り出^でました。そして、おじいさんの振^ふり向^むく方^{ほう}を見^みて、「あれか。」といって、黒^{くろ}いものをねらって打^うちました。

しかし、弾^{たま}は、急^{きゆう}所^{しよ}をはずれたので、おおかみは、雪^{ゆき}の上^{うえ}に跳^{おど}り上^あがって、逃^にげてしまいました。

おじいさんは、自分^{じぶん}は智慧者^{ちえしや}だろうと、家^{いえ}へ歸^{かえ}つてから威張^{いば}つていました。

一方^{ほう}、息子^{むすこ}は、こんな晩方^{ばんがた}、おじいさんを独り^{ひと}で歸^{かえ}したのを後悔^{こうかい}しました。

「どうか、まちがいがなければいいが。」と、心配^{しんぱい}をして、じつとしてゐることができませんでした。それで、小屋^{こや}を出^でて、父^{ちち}親^{ちちや}の後^{あと}を追^おつたのであります。

もう、あちらに、村^{むら}の燈火^{あかり}が見^みえるところでありました。黒い^{くろい}大きなおおかみが、まつしぐらに、うなりながら駆^かけてきました。そしておおかみは、人間^{にんげん}に出^であうと、すぐに飛^とびついて、噛^かみ殺^{ころ}してしまいました。

そのことを後^{あと}から知^しつて、おじいさんは、どんなに歎^{なげ}いたかし
れません。そして、息子^{むすこ}をなくした、おじいさんは、さびしく暮^く
らしたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㋃」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おおかみをだましたおじいさん

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>